

欧州は言うまでもなく長い歴史を持ち、かつ、それらの保存継承の努力を積んでいる地域である。近代以降の産業社会化と合理化の進展のなかでも、文化・歴史の権威は貶められることなく、むしろそれこそが国家の権威を支えているという意識が強く残る国々でもある。ひるがえって日本を考えると、文化の育成と継承、あるいは歴史の継承については、国家において政治経済への必要性や価値よりも、その必要性を一段低くとらえられ、経済が悪くなるとすぐに文化予算の削減へと向かうようである。(新型コロナ禍において、日本が飲食店の閉鎖に対する補助金等を作ったけれども、欧州ではそれと同様に文化活動への支援も同時に当然のこととしておこなったことは記憶に新しい)。

とはいえ、欧州のなかにあっても、政治的・経済的要件においては日本とあまり変わらない国家も多いなかで、そこにはどのような工夫と努力があるか、そこに現代のメディアあるいはメディアがどのようにかかわることができるのか、という点について、現地に足を運びながら、考えることが在外研究の主題であった。これを基本的な問いとしながら、イタリアを中心に、街とミュージアムを歩いて、考察したことの一部を以下に報告する。

(1)「保存とは革命である」―便利さを放棄するという政策をめぐる―

イタリアに生活してまず驚かされることは、生活が不便だということである。私が滞在したヴェネチアでは、ヴェネチア島のなかには、自動車も自転車もキックボードなども、すべて乗り入れ禁止である。島のなかには船か徒歩での移動に限られる。(このため、島の入り口には巨大な駐車場がある)。

また、私有財産であっても勝手に手を加えることは許されない。たとえばエアコン一台を部屋に設置するのでさえ、市の許可が必要なのである。建物の修繕、スクラップ&ビルドなどを勝手にやるのはもってのほか、時間のかかる公的な手続きがいちいち必要で、かつ許可されるとは限らない。とにかく多くの規制をかけて日常生活の不便を引き受けてでも、文化財や歴史的遺産を守る、という明確な姿勢なのである。このようなイタリアの姿勢は、多くの地域が世界遺産だから、と思われがちであるが、実はそうではない。日本と同じく、第二次世界大戦後、1950年代後半から1960年代にかけて高度経済成長を経験し、全体的な産業化を達成するが、イタリアでは早くも70年代にはいると、産業化についてまわる効率化と同質化にたいする内省と、成長と拡大にともなう負の要因について注目されるようになり、このような産業への一方向的傾倒からベクトルを転換させてきたのである。(ユネスコで世界遺産の認定がスタートしたのは1978年、イタリアでの最初は1979年に認定されたヴァルカモニカの岩絵群である)。まだ世界では一般的であった産業シフトからの離脱を、コムーネとしていち早く実践し、その後のイタリアの自治体にとっての重要なモデルとなったのは、ボローニャであった。

ボローニャは、中世、ルネサンス、バロック時代の遺産を多く残している都市であ

るが、世界最古の大学を擁するアカデミズムの中心でもあり、現在でも多くの若者たちが集う光景があちこちで見られる。ボローニャでも 1960 年代まだ、経済的豊かさと便利さをもとめ、100 万人都市や地理的拡大すなわち郊外の開発を、目標としていた。これが 70 年代にはいるとまもなくその舵を大きく反転させ、ヒューマン・スケールの都市づくりを目標に掲げた。ちょうどユーロコミュニズムが魅力を放っていた時期に重なったことも勢いにして、ボローニャは、郊外のニュータウン開発に充てていた予算を、街の中心部の老朽化した建物や住居の保存費用に振り替えるという大胆な政策を打ち出した。古いものを保存し現代に再生しながら、そこに人が住むことによって、街の個性やアイデンティティを確認し、質の高い生活スタイルを守り、魅力のある全体的な都市環境を創出する、というものであり、工業化社会の行き詰まりを先取りした政策であったといえよう。「保存とは革命である」は、この頃のボローニャのスローガンである。地域の個性や誇りを捨てないこと、それにたいする住民の愛着とは、いつの時代であれその歴史に根を下ろさざるを得ないのであり、そのことが文化的な質の高さを保証するほとんど唯一のものであることを表明するとともに、それが産業という近代の巨大な歯車に対抗する革命的な試みであることも表明した、象徴的なスローガンであった。その後、多くのイタリアの都市は、ボローニャに続くことになる。もちろんヴェネチアも、である。

このため、中心部には徒歩で歩くしかないという古都は、イタリアでは珍しくない。便利さを放棄することは、いわば質の高い生活を守るための代償であり、多くのイタリア人がそれを共有しているのだろう。

（２）遺産化への抵抗とメディアの役割

日本では文化財保存というと、古いものをそのまま保存し、それを博物館の倉庫に入れることが想定され、一般に生活する人びとや観光客との関わりなどあまり想定されていない。むしろ、遺物を簡単に外に出すことは保存の観点からは避けるべきことである。とはいえ前述したように、ボローニャに始まる思想を実践しようとするれば、隔離保存だけでは達成できない。めざすのは現在を含めた歴史の中に生きることだからである。

まず、安全上・保存上ないし環境上の必要がある場合は、もちろん隔離された作業がおこなわれるものの、修復等の作業は市民や見学者から見える（のぞくことができる）ように工夫されていることは、日本と大きく違うところである。実際の作業が見せられない場合でも、それらはメディアに記録された形で、しばしば一般に公開されている。歴史と遺された広義の文化財は、現在進行形の無数の努力の上にこそ受け継がれており、だからこそ私たちは現在それらに出会うことができる。そのプロセスを多くの人々に共有してもらうことは、イタリアの現在の価値を共有してもらうことであり、また目の前の遺産が決して過去のものではなく現在を支えていることも理解し

でもらうことでもある。それでこそドネーションが集まることも確かだが、それだけではなく、保存修復技術者への社会的なリスペクトを育てることが次世代の育成にも欠かせないからである。(実際、欧州では美術系歴史系大学のなかに修復家の養成にかかわる部門は、近現代美術作品を創造する部門に引けを取らないくらい大きい)。博物館では、保存修復家は決して裏方ではなく、しばしば表舞台にたつヒーローである。訪問者が声をかけたり質問したりすることができる場所での修復作業も珍しくないし、また、博物館メディアのなかでは、修復作業にせよレプリカの製造にせよ何であれ。昔のヒューマンスケールな技術を現代に再現するさまを見ることができ、その緻密な人的作業のすえに偉大な遺産がつくられるプロセスを実感することができる。このようなリスペクトが社会のなかに根付いてこそ、前述した不便さを寛容していくことが可能になるのである。

このように、文化財を遺産化(＝すなわち過去の人びとが遺したものの、とすること)への抵抗が続けられている。現在進行形の努力と社会的理解を無視しては、歴史の継承が難しいことは、ここでは常識なのであり、その方法としてメディアが多様な方法で最大限駆使されていることは、注目しなければならない。

(3) 文化の理解とメディアの役割

メディア活用として興味深かったのは他に、たとえば作品、作家、文化財の、もともと生み出された時代の風景や歴史的背景をメディア上に映し出し、展示物等の歴史的特性や生活の中に生きた形で利用されていたさまなどを市民に伝えるものである。これは過去の歴史を立体的に理解するためにきわめて有用である。私たちはメディアをつうじて、現在のオーバーツーリズムに苦しむヴェネチアではなく、アドリア海を経て世界に目を広げていたヴェネチアを想像するのである。また過去の民俗資料等は、モノとしてはそこに保存されていても、どのように使われていたのかはモノだけ魅せられても分からないが、それを使うときの生活の様子をメディア上で映し出しておけば、より立体的な文化理解につながる。あるいは作家や画家の博物館などでは、作品の展示のほかに、その人間にかんする資料類が集まっているが、それらを展示するだけではなく、書斎やリビングルームを3次元映像として再現したり、当時の生活音なども再現したりして、臨場感あふれる仕掛けをつくっている場所も複数あった。自分と作家とがここで同じ空間を共有しているかのような錯覚がつけられる。これは身体として作家を理解することにもつながるし、また、博物館がエンターテイメントのような魅力をつくりだしている。市民から距離のあるカビくさい博物館など、おそらく存在できないのだ。さらに、このようなメディア利用は、未来の理解の手助けになる。ヴェネチアでは、もともと長期にわたり続いている地盤沈下に加え地球温暖化などにより、島の消失が懸念されている。島全体が世界遺産であり文化財であるともいえるのだが、この未来予想図もメディアによってシュミレーションすることができ

る。文化財の消失が人為的な努力では如何ともし難い問題についても、メディアからの発信を効果的に行っている。これは社会的な理解を広げるには必要なメディア戦略でもあろう。

メディアが今後、歴史を現在に結び付けてアクチュアリティを創出する役割、および、繰り返される社会課題にたいして現在から未来へ模索するアジェンダを創出する役割は大きく、メディアの可能性をあらためて認識できる。

ただし、このようなメディア利用は、政治的に利用されやすいことにも注意しておかなければならないだろう。伝統の創造はまさにメディアによってこそ行われるからである。たとえば、文化を醸成する帝国の繁栄ないし文化財収集の裏側に、帝国の暴力や戦争の歴史が潜んでいることは、展示にもメディアによっても隠されがちであるのだが、現代の人びとにとって受け継がなければならない歴史でもある。私たちが負の歴史に向き合うための方法とそのためのメディアの役割については、欧州においてすら今後に残された課題であった。

以上。